公開シンポジウム

琉球における言語継承活動の現状と課題

下地賀代子（司会・沖縄国際大学）

趣旨・内容

2009 年 9 月に発表されたユネスコの“Atlas of the World’s Languages in Danger”（消滅の危機にある世界の言語地図）において、琉球弧の諸言語（諸方言）は「消滅危機言語」にリストアップされた。以降、現在に至るまで、記録・継承を念頭においた琉球語の研究は盛り上がりを見せており、特に記録の面での成果には著しいものがある。一方、消滅危機への問題意識をもった地域（シマ）の人々や研究者が、その再活性化の取り組みを活発化させてもいる。

言語調査・研究によって得られた言語学的な知識は、地域に生きる人々にどう還元されるべきなのか、そして、言語の継承にどう役立てていくべきなのか。本シンポジウムでは、記述研究とともに地域と協働した継承活動を展開している研究者がそれぞれの活動の成果と課題を示し合うことによって、記述を継承につなげることの意義を明らかにし、それぞれが抱えている、あるいはこれから抱えるかもしれない課題（それらは、琉球の言語継承活動に伴われる課題として一般化できるだろう）を解決するための糸口を見出すことを目指している。今回登壇いただく 4 組のパネリストは、記述研究者という共通点を持ちつつも、その研究のバックグラウンドはさまざまである。それぞれの立場、目線による活動実践の報告を行ってもらう。

最初の登壇者である重野裕美・白田理人両氏は、奄美大島における同地方言の記録活動について報告する。重野・白田両氏は、同地コミュニティと共に奄美大島方言の基礎語彙調査および談話を収集してその成果の発信を目指すプロジェクトを進めており、本報告ではその具体的な内容を紹介する。両氏には奄美大島方言、奄美喜界島方言を中心とした長年に渡る記述研究の積み重ねがあり、特に重野氏は、奄美大島出身というその出自から地域コミュニティの「内側」の視点を有する研究者である。今回の報告では、研究者としての関わりとともに、言語継承を担うべきコミュニティの当事者としての観点からの話題提供も期待される。

続いて登壇する林由華氏は、宮古島の高校生と協働で進めいている宮古島諸方言の記録活動についての報告を行う。林氏は、宮古語の方言バリエーション全体の記録保存とその電子公開を目指すプロジェクトを継続的に主導しており、本シンポジウムでは、このプロジェクトにおける活動の一環として宮古島の高等学校と共に行っている記録・コンテンツ作成について紹介する。林氏も、宮古池間方言をはじめとする宮古諸方言の記述研究に多くの蓄積を持つ研究者であり、さらに、数年に渡って宮古島に滞在し、地元の方々と生活を共にした経験を有している。地域に長く、深く関わり続ける研究者ならではの問題提起を行っていただく。

３番目の登壇者である山田真寛氏は、与那国島と奄美沖永良部島の 2 地域で行っている継承活動の内容について報告する。山田氏は、消滅危機言語の文法記述・記録保存・継承保存を並行して行う「言語復興の港」プロジェクトの代表者であり、両地域において、研究者と言語コミュニティが共に言語の記録を蓄積し、コミュニティが主体となって継続的に言語継承活動を行える環境の構築を進めている。山田氏も長年与那国島方言および沖永良部島方言の記述研究に携わっており、また、氏のように複数地域の継承活動に関わっている研究者は琉球において稀であることから、その報告は経験から得た様々な知見に基づくものとなるだろう。

最後の登壇者は西岡敏氏である。西岡氏は、沖縄県が行っている「しまくとぅば講師養成講座」および「しまくとぅば検定」の取り組みについての報告を行う。西岡氏はその立ち上げ当時から運営委員として両取り組みに深く関わっている。先の 3 者とは異なり、県という大きな組織による活動だが、これも本シンポジウムが掲げる「地域と協働した継承活動」の 1 つの形と捉えられる。西岡氏は、1992 年以降首里方言を中心とする沖縄語の記述研究に長らく携

わっており、2002 年に沖縄島に居を構え、地元の大学で教鞭をとっている。継承の現場において、いわゆる地元の有識者としてその知識の提供が求められる立場からの実践報告はとても興味深い。

各報告の後、パネリスト間でのディスカッションを行う。また、宮古島において、社会言語学的な立場から言語継承活動を行っている藤田ラウンド幸世氏（指定討論者）からも問題提起をしていただくことによって、議論をさらに深めていく。

継承活動には様々なやり方、あり方が存在し、どのような立場からの実践も必要である。すでに携わっている研究者に対してはその実践の立ち位置の再考や把握に繋がることを、これからという研究者に対しては、各自で実践可能なことを考え、実行する契機となることを期待する。

報告者１　重野裕美（広島経済大学）・白田理人（広島大学）
報告者２　林由華（神戸大学）
報告者３　山田真寛（国立国語研究所）
報告者４　西岡敏（沖縄国際大学）
指定討論者　藤田ラウンド幸世（横浜市立大学）

構成　１．趣旨説明（5 分）
　　２．事例報告（115 分）
　　３．ディスカッション（40 分）
　　４．指定討論（10 分）
　　５．質疑応答（10 分）

謝辞
本ワークショップには以下の研究プロジェクトの研究成果が含まれている。

国立国語研究所「消滅危機言語の保存研究」プロジェクト
日本言語学会（2021 年度）言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクト「地域コミュニティと取り組む奄美大島方言の基礎語彙・談話データの収集・公開」（代表者：重野裕美）
日本言語学会（2022 年度）言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクト「地域コミュニティと取り組む奄美大島方言の基礎語彙・談話データの収集・公開Ⅱ」（代表者：重野裕美）
JSPS 科研費 JP20H01266「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」（代表者：山田真寛）
JSPS 科研費 JP16K16842「宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集」（代表：林由華）
JSPS 科研費 JP19K23094「琉球多良間方言の学習コンテンツ作成の試み―ニーズ調査に基づく―」（代表者：下地賀代子）